

[ラルフ・W・ハリス]「聖霊」

Ⅸ. 満たされつづけること

エペソ人への手紙 5：18-20

ガラテヤ人への手紙 5:22-26

聖霊のバプテスマは目的地ではなく、入口である。それは到達して「着いた」と感じる経験ではない。「私はついに聖霊のバプテスマを受けて喜んでいる。もう待ち望む必要はない」と言う人たちを気の毒に思う。

ペンテコステ派の人たちの大いなる悲劇の一つは、多くの信者たちが聖霊のバプテスマは、それが必然的にすべての問題を解決するところの目的地、すなわち、それ以上、到着することのないものであると考えていることである。彼らはもはや、神を求めることをやめてしまった。彼らは自分たちも聖霊を受けたものの仲間になった、という事実によって満足している。彼らは次第に、生活の中に神の感動を失ってしまっている。サルデスのように、彼らは生きているというのは名だけで、実は死んでいるのである。聖霊のバプテスマはさらに偉大なものであるべきなのに、なんと悲しいことであろうか。



一世紀の聖徒たちはいかに変わったか

あなたの聖霊のバプテスマの経験は、初代教会の聖徒たちを満足させるものだったであろうか。あなたの自分の経験の真正性、また価値を評価するのに、それはよいテストである。それはペンテコステの日に聖霊を受けた弟子たちを、満足させるものだったであろうか。それはステパノを、あるいはパウロを、バルナバを満足させるものだったであろうか。これらの信者の経験を見て、それを量りとして用いていただきたい。

使徒行伝のはじめの各章の学びは、彼らが受けた聖霊のバプテスマは、ただの一回の経験ではなかったことを明らかにしている。それらの初代の信者たちは聖霊に満たされつづけることの必要性を覚え、引きつづき新しい力を受け、聖霊の油注ぎを受けたのである。

ペテロやヨハネは神からの聖霊の新しい満たしを求めることの必要性を知った。美しの門で、足の不自由な人がいやされた後、ペテロとヨハネは支配者たちの前に引き出された。ペテロは「聖霊に満たされ」、祭司の法廷において弁明した（使徒 4:8）。それから使徒たちは自分の仲間の信者たちのところへ帰った。役人たちは二度とイエスの名によって語つてはならないことを、きびしく命じたのであった。この命令に従うことは考えられないことであった。しかし彼らは直面している試練のために助けと力を必要としていた。一同が祈っていた時、「その場所は揺れ動き、彼らはみな聖霊に満たされた」。彼らはペンテコステの日に聖霊に満たされた。しかし、今、再び満たされたのである。

私たちも聖霊のバプテスマを受けた時、満たされても、絶えず力を与えられ、油注ぎを受けるために満たされつづける必要がある。

ある人たちは、絶えず聖霊の油注ぎを受けるのは教役者だけに必要である、と考えるかも知れない。しかし、ステパノの生活と働きはその考えを反証した。彼は最も平凡な食卓のつとめにつく者として選ばれた。しかし、このつとめにつく人々を選ぶために、使徒たちによって規定された資格の一つは、それらの人々が聖霊に満たされていることであった（使徒 6:3）。ステパノは聖霊に満たされていたので、彼は靈的功績のために初代教会において傑出したものとなった。

聖霊の力は初代教会において人々を緊急時のために備えた。パウロはクプロ島で魔術師エルマに出会った時、聖霊に満たされて論破した。聖霊の力によって、この悪人を屈服させ、靈的勝利を得たのであった。

人々を励ますつとめをもったバルナバ（慰めの子の意味）は、彼の靈的能力の深さでいちじるしいものがあった。使徒行伝 11:24 は「彼は聖霊と信仰とに満ちた立派な人であった」と述べている。彼は土地を売って、そのお金を共有の基金に献げる手本を示した。後にエルサレムの教会は、最近救われた者たちの信仰を固めるために、彼をアンテオケの教会へ送った。さらに後には、アンテオケの教会は彼をパウロと共に伝道旅行に遣わした。しかし、主に仕えるためにバルナバは、彼の生活の中に聖霊の油注ぎを受けつづけたのである。

あたかもカルバリの影に生きたと言える、これらの人々が一度ならず、絶えず満たされつづけることを必要としたのなら、私たちにおいては、いかばかりか、それを必要とすることであろうか。聖霊のバプテスマは一度だけの経験ではなく、聖霊に満たされつづける新しい生活の始まりである。

バプテスマの意味するもの

聖霊に満たされるとは一体、何を意味するのであろうか。聖霊に満たされた者と、そのような経験を持たない者とはどのように違うのであろうか。もしそれが、そんなに改革的な経験であるならば、満たされた者の生活と、満たされない者の生活とを比較して大きな違いがあるべきである。

このことに関して、まず第一に可能性において違いがあるということを確認することは重要なことである。この比較は違ったふたりの人間の間におけるものではなく、むしろ聖霊のバプテスマを受ける前のその人と、聖霊に満たされた後の同じ人の間における相違であるべきである。この原則をつかまないならば、その経験について誤解をもたらすであろう。自分自身を完全に神にゆだね、聖霊によってバプテスマを受けた者はその生活において、いちじるしい変化を経験するであろう。そして、もし彼が、始めた聖霊による歩みを保ちつづけるならば、達するとは夢にも見なかった霊の高地を踏むであろう。聖霊に満たされた生活の可能性は二つの一般的分野において認められるであろう。一つは奉仕の領域において、他は靈的成長の領域においてである。一方の領域においては、ここで御霊の実として扱い、他方ではのちの章において霊の賜物として扱うことにする。ついであるが聖霊の力による奉仕の可能性は、実に驚くべきものであるということを言わねばならない。

聖霊はすべての新生した人の中に宿っているので、私たちはそのような生活の中に、御霊の実を見ることを期待出来るのである。クリスチャンは生活の中に現われた御霊の実を持つために、聖霊のバプテスマを受けるまで待つ必要はない。愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制、これらのすべては、すべてのクリスチャンの生活の中に結ばれ、見られるのである。

しかし、クリスチャン品性の成長に関する眼り、聖霊のバプテスマは、クリスチャン生活に対して新しい可能性をもたらすものである。ゆだねることはその秘訣である。信者が聖霊のバプテスマを受けた時、それはその人が初めて完全に神にゆだねたことを意味する。事実、これは異言を語ることに関する一つの重要性である。最も制しにくい器官が、支配のもとに置かれるものである。もし、クリスチャンがすべての面においてゆだねつづけるなら、聖霊はキリストの性質であるこれらの実を豊かに結ぶことが出来るのである。

いかにして聖霊に満たされつづけるか

さて、もう一つの大変実際的な点にはいろいろ。聖霊のバプテスマが終極であってはならないということを知るのは容易である。私たちが油注ぎを保ち、聖霊に満たされつづけなけ

ればならないことは明白である。しかし、それはいかにしてなされるのであろうか。それはもう一つの問題である。

答えは簡単である。余り簡単すぎて見逃がしてしまう危険性がある。聖霊に満たされた生活は、最初の満たしをもたらした事柄を行うことによって保ちつづけられるのである。

聖霊のバプテスマは完全をもたらすものではない。それは失敗を一掃するものではない。成功を保証するものではない。むしろ、それは、もし私たちが神との協力をつづけるならば、私たちをして霊的目標へ達することを可能ならしめるものである。

聖霊の満たしをもたらした**神を待ち望む態度**は、私たちの霊的生活を保つであろう。聖霊のバプテスマは祈りを通して与えられた。**祈りの生活は霊的能力と祝福を保つのに助けとなるであろう。****服従は聖霊のバプテスマを受けるのに必要である。**服従の態度は神が霊的な力を与えつづけることが出来る状態に、私たちを保つであろう。**御言葉に基づいた信仰は、神が私たちを満たしてくれた状態へ導いたのであった。**御言葉による生活は、聖霊に満たされた生活を保つであろう。聖霊のバプテスマを受けるために、私たちは愛と礼拝のうちにキリストに近づかねばならなかった。もし私たちが、**礼拝を毎日の生活の一部とし、絶えず主に近くあることを求めるならば、**私たちは神にあって成長しつづけ、聖霊の力と恵みに満たされた生活を保つであろう。